

## 『函館ワンニャン物語』 ① ～ポン太～

※登場人物、あらすじの紹介は、前回の記事をご覧ください。

### ◆ 小雨降る湯川温泉電停付近（薄暗い夕方）

夕食の買い物の帰り。

自家用車を運転し、聖子が通りかかる。

道路脇にある黒い塊に目が留まる。

聖子「何、えっ！ 動いた？」

自家用車を止め、その場所に行く。

夕方の帰宅ラッシュ。

車の往来が激しい中、黒い塊を手にする。

**ナレーターにより、次の詩が詠まれる。**

### 『どうしてこんなになっちゃったの』

僕 何も見えなくなっちゃった

雨が降ってたよ

とても冷たい雨が・・・

僕 ぼろぼろの雑巾になっちゃった

**鉄の車が僕を轢いたんだ**

「痛いよ 苦しいよ」

僕、このまま死んじゃうのかな

きっとそうだよね

野良猫の僕なんて だれも見向きもしないもの

お母さんの手の温もり 忘れないよ

そっと僕を温めてくれた あの温もり

真黒なボロ雑巾のような僕を助けてくれたお母さんの手

あの日 僕を抱きしめてくれた大きな手

僕 人間なんて大嫌い

いつも僕たちをいじめるんだもの  
怖くて 憎くてしかたなかったよ  
ひっかいて 噛みついたこともあったよ  
僕 人間なんて大嫌いだったんだ

でもね 僕のお母さん人間なんだ  
だってあの日 僕を助けてくれたのがお母さんなんだもの  
野良猫の僕を 優しく抱きしめてくれた  
車に轢かれて 泥だらけの僕をそっと手で包んでくれた  
そんな人間もいるんだよ  
僕その日から お母さんの子になったんだ  
だから 僕のお母さん人間なんだ  
僕 お母さんが大好きだよ  
人間のお母さんが大好きだよ』

◆ 柏木ダイエー付近（同時刻）

仕事を終え自家用車で帰宅途中の館岡  
洋一が、少年期を回想する。  
昭和三十年代の函館。  
柏木ダイエー付近は、畑であった。  
畑に捨てられている子猫を見つけ、家に持ち帰る洋  
一。

洋一「お母さん、これ・・・」

びくびくしながら、母親に見せる。

母親「また拾ってきて。うちは貧乏なんだから飼えない  
って言ったでしょ。何度言えばわかるの。捨てて  
きなさい。」

洋一は、泣きながら子猫をもとの場所に戻しに行  
く。

◆館岡家宅

ひと足早く聖子が帰宅する。  
聖子は慌ただしく保護した猫の世話をする。  
間もなく、洋一が帰宅する。

洋一「ただいま」

聖子「あなた、大変！」

二階から、聖子の叫び声がする。  
洋一は、急いで二階に上がる。

洋一「どうした？」

聖子「これ、見て」

洋一「何だこれ、生きてんのか。」

聖子「何とか。でもかなり体温が低くて、どうしましょ  
う」

洋一「どうしましょって、とにかく温めてすぐに動物  
病院に連れていくしかないだろう」

二人で急いで病院に行く用意をする。

◆○動物病院（診察室）

レントゲン結果、しっぽと右足骨折。

獣医「難しいかもしれませんね。」

聖子「先生、どうか助けてください。お願いします。」

獣医「これだけ体温が低いと・・・、助かったとしても、この足では・・・」

洋一「とにかく、できる限りのことは、お願いします。」

獣医は無言で治療に取り組む。

洋一と聖子は心配そうにただ見つめるだけ。

治療が終わり、高額の治療費を支払い帰宅する。

#### ◆ 館岡家宅

治療を終えた猫を二人が見つめる。

聖子「助かるかしら・・・」

洋一「残念だけど、無理かもしれない・・・」

聖子「何とか助けてあげたい・・・」

洋一「とにかく、できる限りのことをするしかない。」

聖子「また、お金遣っちゃったね。」

洋一「仕方ないさ。この猫、助かったら何て名前を付ける？真黒だから真っ黒くろ介。魔女の宅急便のジジ。それとも・・・」

猫のことが心配で、元気のない聖子を励まそうとして、はしゃぐ。

聖子「ポン太。」

猫のことをじっと見つめ、ぽつんと言う。  
続いて、確かめるように

聖子「うん。ポン太。ポン太がいい」

周りに、数匹の猫がいる。  
二人の横には、二匹の犬がすわっていて、心配そう  
に二人を見つめている。

(「函館ワンニャン物語 ②」へ続く……)